

海外渡航者のための感染予防対策

2013.7.22 京都大学健康科学センター



ワクチン

■ A型肝炎

- ◇ 食物や飲料水を介してウイルスが感染する。発熱や胃腸症状、異常な全身倦怠感を来す。
- ◇ 衛生状態の改善に伴って若年時の自然感染機会が減り、**高齢層以外では抗体を有する者はわずか**である。A型肝炎が致命的になることはほとんどないが、**途上国では罹患するチャンスは低くないので推奨**される。
- ◇ 3回法(初回接種の2～4週後と半年後の追加接種)が望ましい。有効期間は2回接種で2年、3回接種で10年とされている。近年ワクチンの供給が不足して希望時に受けられないこともあるので、時間の余裕を十分見て接種計画を立てる。高価(原価:1本約5000円)である。

■ 破傷風

- ◇ 土壌中にいる細菌が傷口から感染する。毒素により開口障害や痙攣が起こる。
- ◇ 田畑や森林に立ち入らなければ感染確率は低い、感染すれば致命率は高い。小児期の3種混合ワクチン接種が義務化されたため、**昭和44年度生まれ以降の世代の抗体保有割合は高い**。
- ◇ 既接種世代では渡航時の追加接種は必ずしも必要なく、接種するとしても**1回接種で足りる**(母子手帳で確認のこと)。有効期間は3回接種で10年以上とされている。廉価(原価:1本数百円)である。

■ 狂犬病

- ◇ 動物に咬まれてウイルスが感染する。初期の症状ははっきりしないが、進行すると痙攣や麻痺、精神錯乱などを起こす。
- ◇ 狂犬病ウイルスの保菌動物は、**イヌのほかコウモリやアライグマなど多彩**である。動物に直接接触しなければ感染確率は低い、感染すれば致命率は高い。
- ◇ **咬まれてから接種**すればよい(7日以内のできるだけ早期に)。ただし、医療機関へのアクセスが悪い地域、ワクチンが入手できない地域に出張する場合は事前接種も考える。有効期間は3回接種で3～5年。高価(原価:1本1万円弱)である。

【註】同時接種

日本の行政指導では、前記の異なる種類の不活化ワクチンの接種間隔は1週間以上とされてきたが、不活化ワクチンの同時接種で免疫応答の干渉は起きないことがわかっているため、**同時接種も可能**である。

予防薬・処置薬

■ マラリア

- ◇ 蚊が媒介するマラリア原虫によって起こる。感染すると1週間から1ヶ月あまり後に高熱が出て数日続く。発熱は周期的に繰り返すことが多い(マラリアの種類によって異なる)。
- ◇ ワクチンはない。予防薬(クロロキン、メフロキン)はあるが、副作用が強い。
- ◇ 蚊に刺されないことが第一で、DEET入りの**防虫スプレー**は必須。肌を露出しないよう**長袖・長ズボン**にする。蚊帳や蚊取り線香も有用。

■ 旅行者下痢症

- ◇ 病原性大腸菌による場合が多い。東南アジア～南アジアではかなり高い確率で発症する。
- ◇ 生水は飲まないだろうが、**氷入りの飲物、サラダ、皮をむいた果物**に注意する。家庭に呼ばれて食事をふるまわれた場合にどこまで手を出してよいか、悩ましい。
- ◇ 抗生物質(ニューキノロン系)が比較的有効なので、日本で処方してもらって持参してもよい。



イラスト:武田浩乃